

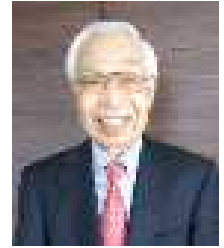


2022年11月号
2022. 11. 30
第57号
発行：わらびじゆく
笑楽日塾



・ 荒井塾長あいさつ

「年寄りが晩秋に思うことは」



日々起こることを見ながら、また、これからのことなどを考えていると笑顔が少ない自分に気づきます。

笑って、笑って暮らしたい。そう願って晩秋の一日を静かに過ごしています。

明るい話よりも暗い話が多い。コロナの第8波が1月中旬にピークを迎えるだろうと専門家達が予測しています。新年がコロナで自粛か？ 最近起きた政界の事は、偉い人達（山際さん、葉梨さん、彼らをぐずぐずといつまでも更迭できなかった岸田さんのふがいなさ）の欠点ばかりが気になって晴れやかな秋晴れのようなスッキリとした気分になれません。そうになると救いはやっぱりスポーツですね。

しかし、アメリカ大リーグも終わり、ニッポンのプロ野球もオリックスのまさかの4連勝で終わってしまった。10月29日オールブラックスとニッポンとの試合は見応えがあった。大男同士のものすごいぶつかり合いだった。知人はこんなことを言っていた。「サッカー好きの人には申し訳無いが、ちょっとぶつかったぐらいで、大げさに転んで痛い痛いとアピールして、ペナルティキックを取ろうとする」。

しかし、サッカーも面白い。11月5日に横浜Fマリノスが3年ぶり5度目のJ-1制覇を果たした。なでしこジャパンの活躍でサッカーファンが増えて、ワールドカップ・カタール大会/日本対ドイツが11月23日にある。今から盛り上がっている。スポーツが好かれるのは、公平で厳正なジャッジがあって、勝者も敗者も称えられるからだろう。

話が振り出しに戻るが、やっぱり気になる。今の世の中は、世界は、これからの未来はどうなるんだ？と気になることばかりだ。

コロナ禍に疲れて、ロシアの一方的なウクライナ侵攻のニュースに疲れ果てた心を、何をして癒やせばいいのか。全国旅行割りの大サービスも我が家には無縁のようだ。あれはゆとりのある人がたくさんおカネを使って経済を循環させる仕組みだ。金持ちのゆとりのある人たちのために、国民の借金でやっている。これが本当に今の世の中に必要な支援だろうか。

そのような事は、ひがまず、他人と比べず、弱気にならず、月に一度の笑楽日塾の塾会で塾生達の元気な表情と闊達な会話を聞いていると、俺もまだ大丈夫だと一次弱気になった心が元に戻っていく。

日本は長寿社会となった。しかし、高齢者一人一人に居場所があるかといえば疑問が残る。人とのつながりがないと健康にも良くない。日本では3世代家族が崩壊し、核家族化が進んだ。血縁よりも地域社会を含めた新しい価値観を持つ社会に切り替わらなきゃ行けない時代になってしまった。だから地域のふれあいの場を作らねばならない。そのため俺は地域が、隣近所が明るく住みやすくなるように精一杯お節介をしている。

大事なものは人の輪に毎日入ること。多くの財産があっても家にぽつんと一人だったら幸せとは言えないでしょう。コロナ禍で私が学んだことは、落ち着いた日常のありがたさ、地域で誰かとすれ違って雑談、友人等との会食、そんな何でも無い日常がいいのだ。人生百年時代に必要なのは自分の「居場所」の作り方ではないだろうか。

近所に6つのマンションがある。民生委員3人が10月に高齢者調査をしてくれた。

総戸数 1,231 戸 （居住者は約 2,200 人）

75才以上の高齢者 378 人 （270 人）

75才以上の夫婦二人の世帯 54 世帯 （54 世帯）

75才以上の一人暮らし 80 人 （49 人）

*（ ）内は僅か4年前の調査結果です。こんなにも早く高齢化が進んでいます。

この情報の中に多くの問題が含まれている。その一つが災害時に高齢者、弱者を助けに行く仕組み作りだ。誰が誰を助けに行くか、これからそのプロジェクトを立ち上げようと思う。世の中を少しでも明るくするために、周りに笑顔が戻ってくるように。

(2022年11月17日に記す)



「報告事項」

1. 笑楽日塾 11月 Zoomオンライン塾会報告

今月も星広行さんからの「蕨の庚申塔を調査報告」の紹介でした。



星さんが庚申塔を調べ歩いた記録は大変参考になりました。星さんの発表は益々奥深くなり興味をそそられます。散歩も目的を持って歩くと、知的散歩になります。



「庚申」は江戸時代に爆発的に流行し、全国津々浦々に広まった庶民信仰です。

現在まで続いている所も多く、庚申の日に人々がお堂に集まり、夜を徹して様々な事を祈り、酒宴を聞いて語り明かす。

要するに一晚中眠らないということが最も重要なのです。

庚申信仰



・庚申信仰でははじめ、釈迦、薬師などを本尊としていましたが、江戸時代に入って青面金剛を本尊に祀るようになり、広く民間に広がりました。本来、庚申信仰と無関係だった青面金剛は、伝戸(でんじ)(結核などの感染症)という伝染病から守ってくれるほとけであったところから、伝戸と三戸を関連づけたものと思われます。

・「庚申待」は、元来は一人静かに夜明けを待つだけでしたが、次第に大勢集まった方が効果があるとして「講」というグループがつけられ、一定期間経れば、所願が成就し、無事終了したことを記念して「庚申塔」「庚申塚」が建てられました。

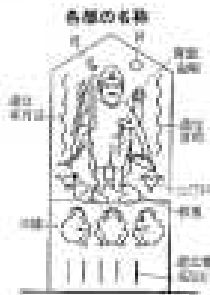
庚申塔の形



1長 2民 3徳

- ・形としては様々ありますが、取り敢えず3つを紹介します。
- ・左は尖頭角柱型と呼ばれる柱型のもので「庚申供養塔を」メインに彫っています。
- ・中は板碑と呼ばれるもので極シンプルに文字は彫刻です。
- ・右側は傘付角柱で上部には唐破風傘と呼ばれるものが乗っていますが、この傘の部分が無いのものが多くあります。作った人達の好みや状況に合わせて各塔のいいところをして作っているようにも見えます。

言葉の意味



- ・一般には、足元に邪鬼を踏みつけ、六臂(二・四・八臂の場合もある)で法輪(仏教の教義)・弓・矢・剣・錘杖・ショケウを持ち忿怒相で描かれることが多い。頭髪の間で蛇がどくろを巻いたり、手や足に巻き付いている場合もある。また、どくろを首や胸に掛けた像も見られる。
- ・顔の色が青い金剛童子。大威力があって病魔・病鬼を払い除く。四臂または六臂のものが多く、中には二臂または四臂もあり、赤い三眼の忿怒相をしている。民間で行われる庚申待に本尊として祀られる。

ここから星さんの探索が始まります。

ここが星さんの庚申塔探りです



- ① 長泉院(非公開) 中央5-13
- ② 歴史民俗資料館(非公開)
- ③ 徳丸家(非公開) 北町3-5
- ④ 路傍に3基 錦町3-1
- ⑤ 錦町5-12

明治堂(三蔵院) 中央5-2 車道に向かっていると左側の墓境内に4基



車道に入るとすぐ左側に5基の庚申塔が並んで立っています。

噂の庚申塔まとめ

- ①長泉院 (非公開) 中央 5-13
- ②歴史民俗資料館 (非公開)
- ③徳丸家 (非公開) 北町 3-5
- ④路傍に3基 錦町 3-1
- ⑤錦町 5-12

「奉(ほう)造立(ぞうりゅう)庚申(こうしん)為(のため)二世(にせい)安楽(あんらく)」三猿

他にも沢山ありますが誌面の関係上、ここまでをご紹介いたしました。



「シニアの風」

(順番制で行います。12月「シニアの風」投稿は 先崎 隆さんです)

「宗教について考える」

八木 守



私の家は浄土真宗で親鸞聖人を宗祖とする宗派ですが、
仏教の開祖であるお釈迦様がこの世に誕生したのは、はっきりとした年代は分かってないそうで、今から約 2,500 年前の
4月8日と伝えられています。シャーキヤ（釈迦）族の国王である父・シュッドーダナと、母・マーヤーの間に生まれました。

お釈迦様は妻と息子とともに平穏な生活を送っていました。
しかし、心の中では常に悩みを抱えていました。すべての人が直面する「生きること・老いること・病気になること・死ぬこと」。この4つの苦しみから人々を解放できないかという悩みでした。般若心経の「度一切苦厄」:「生老病死」の部分ですね。
何故、「生きること」が苦になるのか？ わかるような。

お釈迦様は、29歳のときに妻と息子を城に置いて出家し、バラモン教の教えに従いながら修行の日々を過ごしましたが、お釈迦様は苦行をやめ、菩提樹の下で瞑想をするようになり、やめることなく何日も瞑想を続けました。そして、12月8日、お釈迦様はついに悟りを開いたのです。このとき、お釈迦様は35歳になっていました。

お釈迦様は80歳で亡くなるまでの約45年間、仏教の開祖として人々に教えを説き続けました。その教えは年を経るにしたがって、誰にでもわかりやすいように、また、実践的になっていったと言われています。

それに対して、昔騒がれた「オーム真理教」や、今騒がれている「宗教法人世界平和統一家庭連合」と言う宗教団体は、本当の宗教でしょうか？

エリートを集め、サリンを撒いた「オーム真理教」、高額布施を徴収し、私腹を肥やし、家族崩壊を招いている「宗教法人世界平和統一家庭連合」は、人間をマインドコントロールして金儲けをしている似非宗教ではないでしょうか。

最後にブッダはこう語っています。世の中の浮き沈みに触れても、心の乱れを離れて安穩であること。それが最高の幸せであると。本当の幸せは外に求めてもありません。自分の内部を見つめ、自分や家族が幸せになるように今を生きましょう。 完



八木 守

十牛図 第3段階
見牛（けんぎゅう）

11月は比較的好天気が良い日が続きましたが、雨が欲しい農家の方もいられるので自分は晴れた方が良いとばかり自分勝手なこと（自己中）を言えないのが難しいですね。

来月は12月。大掃除の月ですが、私は早めの大掃除をしています。若い時とは違い一気に片付けるのは無理で、息子が休みの時は、駐車場に車があるので、掃除して車に傷でもつけたら大変なので、休みでない日と自分の予定のない日を選び、小刻みに掃除をし始めました。皆様はどのように大掃除していますか？



さて、10月号の続きで今、作成中の「十牛図」の第3段階・見牛（けんぎゅう）の挿絵（水墨画）をお届けします。

第3段階 見牛（けんぎゅう）：牛を見つける。

第1図「尋牛（じんぎゅう）」で牛を探していた旅人は、第2図「見跡（けんせき）」で牛の足あとを見つけました。そして、この第3図「見牛（けんぎゅう）」に至り、ようやく牛を見つけました。しかし、牛はその姿の一部しか現れていません。

向かいあう旅人と牛。そこには、まだ少しの距離があります。つかまえようとすれば、牛は逃げてしまうかもしれません。牛は、「こうなりたい」という自分自身の姿です。お経の教えや他人の人生を参考にしながら十分考えた、自分だけの目標です。

目標があれば、そのためにすべきことが何なのか、自然に分かるようになります。そして、その目標に近づくために必要なものは、自分の本来持っている感覚や日々の行いなど、**決して特別なものではない**、というのが「十牛図」の教えです。

さて、目標を追いかけてきた自分は、やがて目標によって成長していきます。こうなれば、もはや自分と牛（目標）とは別のものではありません。

旅人は、何の手がかりもないところから、お経などの言葉によって足あとを見つけ、ついに鳴き声によって牛の姿を見つけました。しかし、この鳴き声も、旅人がほかの事に気をとられて注意していなければ、聞こえなかったでしょう。

牛の鳴き声に気づくきっかけは、人によって違います。足あとだったり、においだったり、ひょっとして偶然かもしれません。でも、いずれにせよ、どんなに小さな鳴き声でも聞きのがすまいと思っていたからこそ、聞くことができたのです。

次回は第4段階 牛をつかまえる「得牛（とくぎゅう）」をお届けします。

続く